

居場所を奪われたので
逆襲させていただきます

（黒幕令嬢の華麗なる逆転劇）

チャステイー第三王子

スパエラ王国の第三王子で、ユースティシアの婚約者。努力家で優しい性格だが、優秀な兄達に引け目を感じている。

ユースティシア

プライド伯爵家の令嬢で、王国きっての名家グリッド公爵家の血筋を引く才女。大病を患い、二歳から七歳まで入院生活を送っていた。

エンビー

ユースティシアの不在中に、プライド伯爵家に引き取られた少女。ユースティシアの三歳年上だが年齢より幼く我儘。

ユーノス・プライド伯爵

ユースティシアの父で先代グリッド公爵の末子。画家としても活躍している。

ロディーテ・プライド伯爵夫人

ユースティシアの母。類稀なる美貌で知られる社交界の花形。

トレイラン王太子

スパエラ王国の第一王子。文武両道な王子として貴族や国民から支持されている。

グリッド公爵

ユースティシアの伯父。グリッド公爵家の現当主で貴族派のトップ。厳格な性格。

プロローグ

ユースティティア・プライドは、伯爵令嬢である。

ただの伯爵家の娘ではない。彼女の伯父は王国きつての名家の当主、グリード公爵で、二人の伯母も有力貴族に嫁いだ名夫人だ。

更に、両親は社交界の花形で、父のユーノス・プライド伯爵は、若くして画家として成功を収めていた。

先代のグリード公爵夫妻の末子として生まれたユーノスは、兄と姉二人とは年齢がやや離れていたためか、家族から大層愛されて育った。

年を取ってから生まれた息子は可愛いというが、まさにその通りだった。

兄や姉達からしても年の離れた弟は競争相手にはならず、素直に可愛がれる対象であった。

公爵家の後継者が立派に育ち、次の世代を産み育てる段階に移っていたのも良かったのだろう。一族の間で後継者争いなど起きるはずもなかった。

だから、ユーノスは家族のみならず親戚一同が安心して愛することができた存在だった。

溺愛されていたからといって、教育を疎かにしていたわけではない。

いくら可愛いといっても公爵家の次男だ。当然、公爵家の一員として相応しい男に育つよう厳しく躾けられ、そのおかげで、ユーノスは優秀な成績を修めていた。公爵家が持つ「伯爵」位の継承を許されたのが、何よりの証拠だ。

グリード公爵家は他家にはもちろん、自家の者にも非常に厳しい家なのだ。一定の才覚を持っていなければ、実子であっても爵位を譲らない実力主義の家柄だ。

甘やかすだけの育てられ方はされなかったものの、それでもやはり末っ子は可愛いかったのである。ユーノスは政略結婚をした上の三人とは違い、恋愛結婚が許された。

彼が己の妻にと望んだのは男爵家の娘、ロディーテ。社交界で「妖精姫」と呼ばれるほど美しい少女だった。

身分が低い相手だったが、グリード公爵家からするとこの縁組は悪くなかった。むしろ、可愛い息子や弟が「愛する女性と結婚する」ことをことのほか喜んだ。その背後には、「権力のある家から嫁を貰うと後々面倒になる」という意図が隠されていたが。

こうして、高位貴族としては珍しく恋愛結婚を果たしたプライド伯爵夫妻には、ほどなくして可愛らしい娘が誕生する。

それが、ユースティティア・プライドだった。

だが、幸福の絶頂にいた彼らを予想だにしない悲劇が襲った。

娘が二歳になった時、大病を患い、入院を余儀なくされたのだ。

突然訪れた悲劇に嘆き悲しんだ夫妻は、それでも「娘は生きている」という現実に見出し

た。「治療を施せば、きっと良くなる」と。

病院での治療は、夫妻の期待通りの効果をもたらし始めた。夫妻は祈り続けた。

しかし、病院のベッドで苦しむ愛娘の姿はロディーテの心を追い詰めていった。

「どうして、私の可愛いユースティティアがこんな目に……」

嘆く妻を、ユーノスは「大丈夫だ。きっと良くなる」と根拠のない言葉で慰めることしかできなかった。

そんな時だった。

夫妻がロディーテの従兄にあたるラース騎士爵の娘、エンビーを預かることになったのは。

健康体で無邪気に笑う少女の姿は、幼い娘が苦しむ姿に傷ついていたロディーテの心を大いに癒やした。彼女はエンビーを娘同然に可愛がった。

妻の笑顔が戻ったことにユーノスは安堵し、エンビーの存在を容認した。そしてまた、実の娘の代わりに従兄の娘を可愛がる妻に何か言うことはなかった。

ロディーテの心が癒やされるなら、それで良いとすら彼は思っていたからだ。

そこに親元から離されたエンビーへの憐れみや同情などはなかった。

騎士爵家の娘が伯爵令嬢のごとく振る舞う姿を見ても、ユーノスが何かを言うことはなかった。

後々、エンビーが大変な目に遭うと予想できても、彼は何もなかった。全ては愛する妻のために。数年後、病を克服したユースティティアは屋敷に帰ってきた。

物語は、そこから始まった。

第一章 歪な伯爵家

スパエラ王国・王都。

春の訪れを予感させる、よく晴れた日。

プライド伯爵邸から一台の馬車が出発したのは、そんな日でした。

馬の蹄が石畳を蹴る乾いた音と、馬車の車輪が奏でるリズムが聞こえてきます。

「お母様達はまたお出かけをしたの？」

私は、屋敷のエントランスでその馬車を見送っていた執事に尋ねました。

「はい。今日は、歌劇を観に行かれると仰っております」

「そう……。彼女も一緒なのかしら」

「はい。いつものように、一緒にございます」

「そう……。お母様にも困ったものだわ」

分かっていたことですが、改めて聞かされると溜息が出ます。

私の様子を察して、執事が告げました。

「お嬢様、旦那様は仕事でしばらくアトリエに籠られるそうです。恐らく、今日一日は出てこれないでしょう。いかがなさいますか？」

伯爵家の執事は優秀です。私が何を言いたいのかを察して、先回りしてきました。

「手紙を書くわ」

「どなたにでしょうか？」

「もちろん、お祖父様達によ」

「承知いたしました。それでは、すぐに準備をいたします」

「ええ。お願いね」

私は踵を返すと、自室に戻りました。

そして、机に置かれたペンを手に取り、父方の祖父母にこの屋敷の現状を報告するために、手紙を書きました。でも、お祖父様達のことです。既にご存知でしょう。きっと、執事達が知らせているでしょうから。

「お祖父様達ならしかるべき対応してくれるでしょう」

本来なら現在の本家当主である伯爵様にもお知らせするべきでしょうが、生憎、伯爵様はここ王都ではなく領地にいらつしやいます。社交シーズンが始まれば王都に来られるでしょうが、今は無理です。

「伯父様には、また改めてお知らせしましょう」

私はペンを置き、書き終えた手紙を封筒に入れました。

コンコンと、ドアがノックされたのはその時です。

「どうぞ」

「失礼いたします、お嬢様」

執事は一礼すると、私の傍にやって来ました。

私は封筒を執事に渡します。

「これを」

「お預かりいたします」

執事は封筒を受け取ると、蜜蝋みつろうを垂らし、家紋を押し封印しました。

「では、行つて参ります」

「ええ。お願いね」

執事が退室すると、部屋には私一人が残されました。

私は窓から見える空を眺めながら、今ここにいないお母様の所業を思い返しています。

「お母様は何を考えていらつしやるのかしら」

公爵家の次男、現伯爵を夫に持つというのに、あまりに自由奔放すぎるのです。お母様が置かれた境遇を考慮したとしても、見過ごせるものではありません。

「お父様も、どうしてお母様の行動を咎とがめないのかしら」

私の記憶にある限り、お父様がお母様を注意したことはありませんでした。

「本当に……困つたものだわ」

男爵令嬢から伯爵夫人になったお母様は、世間というところの「玉の輿」に乗った女性です。

ですが、その割には呆れるほど悪意に疎といいますか、無知がすぎると申しますか……。妬ねたみ

や嫉まみといった負の感情に鈍く、自分が人に嫌われているとは思えもしないのです。

「お母様の場合、お父様が過保護でいらつしやるからという理由もあるのでしょうか……」

子供の私でも分かることを、お母様は理解していません。

お母様はいいでしょう。お父様を守つてくださいます。

ですが、私は違います。

この私、ユースティティア・プライド伯爵令嬢は、違うのです。

公爵家直系の血を引いているけれど、身分は伯爵家の娘。

スパエラ王国では、女子の爵位継承は認められていません。

私が婿取りをするにせよ、どこかに嫁入りするにせよ、両親から放置されたも同然の娘に社交界は甘くありません。

私は現在、八歳。幼少期の社交デビューといえる「お茶会」に参加するには少し早い年齢ですが、それでも社交の場への誘いがゼロというわけではありません。

執事長のフィデは「今のところは、参加する必要はないでしょう」と言っていました。その後、言葉が不穏でした。

「執事仲間の間で少々噂になっております。メイドの間でも噂が広がっているかと――」

つまり、プライド伯爵家の実情が噂として他家に周知され始めているということです。

「このままでは、いずれ社交界で伯爵家の悪評が広まってしまうわ」

いえ、もう広まっているのかもしれませんが。

「お母様の人形遊びには困ったものだわ」

事の始まりは、私が二歳で大病を患い生死の境を彷徨ったことでした。

今でこそ健康体ですが、当時はベッドから起き上がれない有様だったのです。それは数年間の入院を余儀なくされるほど重い病で、医師から説明を受けた両親のショックは計り知れないものでした。特に、まだ若いお母様には耐え難いものだったでしょう。

『子供は女の子が良いわ』

『私とユーノスの子供ならきつと可愛いわ』

『ああ、早く生まれなかつたら』

『名前は何にしようかしら』

お母様はそんなふうに、我が子の誕生を心待ちにしていたと聞いています。

だから、待望の娘を亡くしかけたことで、お母様は不安と恐怖に押し潰されてしまったのでしよう。

病院のベッドで苦しむ娘の姿を見たくないという、お母様の苦悩は分かります。

娘の代わりに親戚の子供を可愛がる気持ちも分からなくもありません。

ですが、実子が病を回復した後も、「娘の代わり」として他人の子供を可愛がるお母様の気持ちは、私にはどうしても理解できませんでした。

お母様のお気に入りの子女の名前は、エンビー・ラース。

ラース騎士爵の令嬢で、私より三歳年上の十一歳の少女です。

お母様はエンビー嬢を大層可愛がっていて、事あるごとに彼女を自分の傍へ置きたがるのです。

「娘の代わり」が成立するためには、実の娘が屋敷にいないことが前提として必要ですのに……」

その前提を失つてもなお、お母様はエンビー嬢を手放さなかつたのです。

私が彼女の存在を知ったのは、一年前。退院して伯爵邸に戻って来た日のことでした。

一年前。

五年ぶりに戻ってきたプライド伯爵邸は、歓迎ムード一色でした。

大事な一人娘の退院祝いで、お祭りのように賑わっていました。

「退院おめでとう。ユースティティア」

「ありがとうございます、お父様」

お父様であるユーノス・プライド伯爵が顔を綻ばせ、私の頭を優しく撫でてくれます。

お父様の容姿は私と同じ黒髪に深い緑の瞳。けれど、髪は巻き毛の私と違い、ゆるくウェーブしています。

「本当に良かったわ、ユースティティア。お帰りなさい」

「ただいま帰りました、お母様」

お父様の横で満面の笑みを浮かべるのは、お母様であるロディーテ・プライド伯爵夫人。

ピンクブロンドの髪にピンクの瞳、妖精のような容貌の持ち主であるお母様は、二十代半ばとは思えないほどの愛らしさと若々しさで、本人もそのことを誇りに思っています。



玄関ホールに集う使用人達の中には涙ぐんでいる者もいます。

「お嬢様、ご快復おめでとうございます」

「お元氣になられて……本当に……良うございました」

「またお仕えてきて光榮にございます」

使用人達は口々に「おかえりなさいませ」と、私に声をかけてくれます。

私はその全てに「ありがとう」と返していききました。

そんな温かい雰囲気の中、パタパタと足音を立てて、一人の少女が駆け寄ってきました。

「ロディおねえちゃま！」

いきなりお母様に飛びついてきたのは、見知らぬ少女。

赤みがかった茶色い髪をツインテールにした十歳くらいの女の子でした。

「あらあら、エンビーちゃん。走ってくるなんて危ないわよ」

「ごめんなさい。ロディおねえちゃま」

「ふふ、いいのよ」

エンビーと呼ばれた少女は、あろうことか、屋敷の女主人であるお母様に抱きついて、子犬のようになじられているではありませんか。

少女に抱きつかれても笑顔を絶やさないお母様の態度に、私は思わず目を剥いてしまいました。

そもそもこの少女は誰でしょう？ 明らかに私より年上だと分かるのですが、立ち居振る舞いが幼すぎます。

「ロディおねえちゃま、これからお庭で遊びましょう！ おままごとしましょ」

「ごめんなさいね、エンビーちゃん。今日はダメなのよ」

「え〜〜？」

「おねえちゃまの娘が帰ってきたのよ。今日はお祝いしないと」

「え〜そんな〜！ あ！ 誰……？」

少女はようやく私に気付いたのか、目をぱくりさせています。

感情表現が豊かなのでしよう。グレーがかったピンクの目が、私を捉えた時に一瞬だけ歪んだのが気になりましたが……

「もしかして、この子ですかあ？」

「そうよ。私の娘のユースティティアよ」

「ふ〜ん……」

お母様に抱きついたまま、少女は私の顔をマジマジと見つめてきました。为什么呢？ 不
馴な視線に私は眉を顰めたものの、少女が意に介した様子はありません。

「ユースティティア、彼女の名前はエンビー・ラース。騎士爵を持つ騎士団の副団長の息女だよ」
私が呆気にとられている間に、お母様の横から私の隣に移動してきていたお父様が少女の正体を
教えてくれました。

「そうなの！ お母様と従兄妹のジャスティお従兄様が、騎士団の副団長をしているのよ。それで
ね、奥様が王子様の乳母に選ばれて、王宮暮らしになってしまったの。お家に小さな子供を一人で

いさせるなんて可哀想でしょう。だからお母様、エンビーちゃんを引き取ったの！」

お父様の説明を補足する形で、お母様が少女の身の上を語ってくれました。

ですが、両親が揃っているのに従兄の娘を引き取るという行為に、私は引っ掛かりを覚えてしま
いました。

「さあ、エンビーちゃん。ご挨拶して」

「……こんにちは」

お母様に促され、少女は渋々といった態度で私に頭を下げました。

「私は、プライド伯爵家のユースティティア・プライドと申します。どうぞ、お見知りおきを」

私は少女にカーテシーを試みました。

すると少女は「私はエンビー……。よろしく」と言うと、興味なさそうに顔を背け、私から視線
を逸らしてしまいました。そしてお母様の腕にしがみついたまま、「おねえちゃまと一緒にいい」
と、お母様に甘え始めたではありませんか。私は一体何を見せられているのでしょうか？

お母様は自分の頬に手をやり、「あらあら甘えん坊さんね」と呟きましたが、その実、満更でも
なさそうな様子です。その証拠に、お母様は少女を注意する素振りすら見せず、「仕方がないわ
ね。ちよつとだけよ」と、少女の頭を撫で始めたのです。本当に、なんなのでしょう？ この光景
は……

「おねえちゃま、早く早くー！」

「はいはい」

お母様は少女の手を取ると、そのまま屋敷の外へ出て行ってしまいました。

「ユースティティア」

「はい、お父様」

「詳しい話は夕食後にしよう」

「先ほどの少女のことですか？」

「ああ。お母様も交えて家族三人で話し合おう」

「何かあるのですか？」

「……そうだな。まず、あのエンビー嬢はお母様のお気に入りだ」

「それは見ていて分かりましたわ」

「そうか、そうだな。だが、それだけではない。なんと説明すればいいのかな……」

お父様は腕を組んでウンウン唸る仕草をなされました。それが何だか芝居がかっているように見えたのです。

もしかして、お母様と少女の関係をお父様はあまり好ましく思っていないのでは？ そう感じました。

ふと、周囲を見回すと、使用人達はお母様達が去っていく後ろ姿を、どこか苦々しげに見送っています。

どうやら、お母様の行動は屋敷内では歓迎されていないようです。それとも少女の行動があまりにも目に余るせいでしょうか？ 挨拶ひとつまともにできない少女に、プライド伯爵家の品位を貶

められていると感じたのかもしれませんが。少女の言動を容認しているのは、お母様だけのようです。

その日の夕食は、私の退院祝いを兼ねて親子三人での食事となりました。

お母様は何か言いたそうでしたけれど、提案者がお父様だと知ると、渋々ながら了承したのです。食事は終始和やかで、お父様もお母様も私の快復を喜んでくれました。私もまた、この屋敷に戻ってこられたことに安堵しました。

ですが、そんな穏やかな雰囲気は食後のティータイムに一変したのです。

「それでね、ユースティティアもエンビーちゃんと仲良くなってほしいの。二人並んだら姉妹みたいじゃない？ エンビーちゃんのほうが年上だから、エンビーお姉様”って呼ぶのはどうかしら？ ああ、なんて素敵な響きなの！」

嬉々として妄言を垂れ流すお母様を前に、私は笑顔のまま固まってしまいました。

だってそうでしょう。エンビー嬢の態度は誰がどう見ても、私と仲良くする気ゼロでした。

あの態度を間近で見ているにもかかわらず、お母様は私と彼女が仲良くできると本気で思っているようです。

「そうだわ！ 二人にお揃いのドレスを仕立てましょう。色違いなんてどうかしら？ エンビーちゃんにはピンク、ユースティティアにはグリーンが似合いそうだわ」

お母様は目を爛々と輝かせて「早速仕立て屋を呼ばないと」と、お父様に告げました。

「ユースティティアは屋敷に戻ってきたばかりだからね。あまり無理をさせてはいけないよ」

さり気なくお父様が止めてくださいますが、お母様は「でも」と難色を示すのです。

「これからはずっと一緒にいられるんだ。焦らなくてもいいだろう？」

「それもそうよね……。お母様、ちょっと先走りすぎちゃったわ」

軽く溜息を吐くお母様に、お父様は「いいんだよ」と苦笑しておられました。

その後も暴走するお母様をお父様がやんわりと軌道修正していくというやり取りが続き、私は完全に置いてけぼりを食らっていました。

お父様が「ユースティティアに話しておきたいことがある」と言い、お母様に席を外すよう求めたことで、ようやく本題に入るのだと悟りました。

「ユースティティア。エンビー嬢のことだが」

「はい」

「彼女は、我が伯爵家との血縁関係はない。お母様が何と言おうと、彼女がユースティティアの姉になることはない」

要するに、自分とは赤の他人なので伯爵家の養子にはしない、と言いたいのでしょう。肝心のお母様にはその意図が通じていないようですが……

「エンビー嬢の母君は、五年前に子供を産んだのだが、残念なことに死産してな。そんな時に王家から乳母にと声がかかったんだ」

「五年前と仰いますと、第四王子殿下の乳母ということですか？」

「そうだ。父君のラース副団長は王家の要請とはいえ、臥せっている奥方のことを思つて断ろうと

したそうだ。だが、奥方が強く希望したので第四王子殿下の乳母として王宮に上ることになったようだ」

「ラース副団長夫人は、家族と離れて王宮で暮らすことに抵抗はなかったのでしょうか？」

「鬱状態に陥っていたらしいが、王子の乳母に抜擢されたことで、立ち直ったらしい」

「そうですか……」

そう簡単に立ち直れるものでしょうか？

まあ、人の心は何が切っ掛けで変わるか分かりませんから、一概に否定はできませんね。心機一転するため、環境を変えろという選択はありでしょう。

「夫人が喪った子供が男児だったのも影響しているのだろう」

「王子を我が子の代わりに、と？」

「そうだと断言できないが、可能性は高いと思うよ。だから副団長も奥方に強く出られなかったのだろう」

「お父様、質問してもいいですか？」

「なんだい？ ユースティティア」

「お母様がエンビー嬢を引き取られたのも、私の代わりを求めたからですか？」

「最初はそうだった。夫人が王宮に上がると聞いて、仕事で忙しい副団長に子育ては厳しいだろうと、お母様が自ら名乗りを上げたんだ。副団長とは仲の良い従兄妹同士だったようですね」

ラース副団長の身分は騎士爵。一代限りとはいえ貴族は貴族なので、その娘はギリギリ伯爵家で

引き取れる身分でしょう。

お父様の話では、伯爵家に来た後もエンビー嬢は父親である副団長と定期的に面会しているそうです。

「ロディーテが騎士団に差し入れを持って行く時に、同行させる形で会わせているよ」

引き取るといっても、名目上は大病を患った娘にショックを受けている伯爵夫人を慰めるため。養女として迎えたわけではありませんから、完全に親から引き離すことなんてできません。お母様がエンビー嬢を騎士団に連れて行く背景には、そうした事情があるのでしょうか。

今まではそれで良かったのかもしれませんが、実の娘が病を克服し、屋敷に戻ってきたのです。当然、今まで通りというわけにはいかないでしょう。

「エンビー嬢を親元に返すという選択肢はないのですか？」

「……それは難しいだろうね」

つまり、「お母様がエンビー嬢を手放したくない」のでしようね。

「しばらく様子を見るしかないだろうね」

「悪化しなければ良いのですが」

「エンビー嬢がかい？」

「お母様と、両方です」

私の返答に、お父様は苦笑されました。きっと私の懸念を理解したのでしょう。こういった嫌な予感ほどよく当たるといいますし……

数ヶ月が過ぎましたが、予想通りと言うべきでしょうか。お母様とエンビー嬢は、まったく態度を改める様子はありませんでした。

「エンビー嬢の将来を見据えて、ユースティティアの話し相手にと考えていたのだが……。結局、無駄になってしまったな」

やれやれ、とお父様は肩をすくめました。

ですが、私は知っています。いいえ、気が付いてしまったというべきでしょうか。お父様の本音を。

本当のところは、エンビー嬢の将来などまったく心配していないということ。

お父様にとって大事なのはあくまでお母様。

愛する妻の気持ちこそが一番大事なのであって、エンビー嬢がどうなろうと知ったことではないのだと。

もっとも、私がお父様のそういう性格を知ったのは退院して屋敷に戻り、一緒に暮らし始めてからでした。それまではどこか貴族的な上に立つ者の傲慢さはあるものの、基本、穏やかで優しい人だと思っていたのです。一緒に暮らすうちに、病院にお見舞いに来てくださっていた時には、気付かなかったお父様の一面を垣間見るようになりました。

「お父様は、エンビー嬢のことをどう思っているのですか？」

私は思い切って尋ねました。

「どういう意味だい？」

「エンビー嬢の現在の肩書はメイド見習いです。実情はどうであれ、彼女を将来的には、私の専属メイドとして召し抱える気でおられたのではありませんか？」

「そうだな」

「今までは幼い子供ということで大目に見られていましたが、エンビー嬢は来年十二歳になります。そろそろメイド見習いとして教育を始める時期ではありませんか？」

「確かに一定の年齢になったら、見習いとして働いてもらおうとは考えていたよ」

お父様にとっても不本意な状況なのでしょう。

まさか、私が戻った後もお母様がエンビー嬢を娘扱いするとは、考えていなかったに違いありません。お気に入りの子供といえ、実子ではありませんし。

お父様はきつと、「実の娘が戻ってきたのだ。他人の子供に与えていた愛情はそのままそっくり娘に与えるはずだ」「娘の代わりに可愛がついても徐々に落ち着いてくるだろう」と、考えていたのでしょう。

ですが、お母様は想像の上をいったのです。

『エンビーちゃんは可哀想な子なの。あんなに小さいのに一人ぼっちで……。だから、お母様がエンビーちゃんの“ママ”になってあげることにしたの！ そうすればエンビーちゃんは一人ぼっちじゃなくなるわ』

そう言うって譲らないのですから。

「エンビー嬢は私にあまり関わろうとできません。…… “関わらない” というよりも “関われない” といったほうが正しいのかもしれないが」

理由は単純明快。エンビー嬢は勉強嫌いなのです。いえ、嫌いという生易しいものではありません。「大嫌い」なのです。

一日の大半を家庭教師と共に勉強することに費やしている私は、必然的にエンビー嬢と会う機会は限られます。加えて、自分で言うのもなんですが、私は優秀なほうです。基本のマナーはもちろんのこと、歴史、地理、数学など一通りの知識を叩き込まれ、現在は語学を中心に学んでいる最中です。その他にもダンスから音楽、刺繍に至るまで、多岐にわたって学びました。

本来なら、エンビー嬢も私と共に学ぶはずだったのですが……

「学ぶことの大切さが理解できないのだからな」

「そうです」

実際、お父様から「一緒に学ぶといい」と言われていたにもかかわらず、エンビー嬢はお母様に泣きついて勉強から逃げ回っているのですから。

さすがに無作法者を私の専属メイドにするのは無理です。そんなことをすれば家の品位を落としかねません。

彼女が自分の役割を理解していないのは明白でした。

娘の代わりに愛されてきた少女。それが悪いとは言いません。今まではそれが彼女の役割だったのですから。

屋敷の使用人達もエンビー嬢を“伯爵家の娘役”“奥様の心を慰める役”と、受け入れていました。

ですが、既にその役割は終わっているのです。

それを彼女は理解していなかった。

今も自分が“伯爵夫人の娘役”だと思っているのでしょうか。いいえ、違いますね。役割であることすら理解していないのかもしれませんが。

「無知は罪だというからね」

含みのあるお父様の物言いに、私は思わず息を吞みました。私も同じことを考えていたからです。ただし、私がそこにお母様を加えていたのに対し、お父様はエンビー嬢一人を指していたのでしょうか。私とお父様では、無知の意味合いは天と地ほどの差があるのでしょうかね。

ブライド伯爵邸の図書室の一角には飲食スペースがあります。

何代か前の当主が読書家で、本を読みながらお茶が飲めるように、図書室の一角にスペースを設けたことがきっかけだそうです。すると、息子達の学力まで飛躍的に伸びたのだとか。

そういった背景が影響しているのでしょうか。図書室の飲食スペースは、現在も撤去されることなく存在しています。

利用できるのは当主とその家族に限られているので、不平不満を口にするにはここほど適した場所はありません。

「ふう……。普通は分かりそうなものだけけど……。一体、どこをどうしたらあなるのかしらね」

ハーブティーを一口飲んでから、私は机の向かい側に座っている執事長のフィデに愚痴をこぼします。

「エンビー嬢のことですか」

私の愚痴に苦笑で応える様子を見るに、フィデもまたエンビー嬢の言動に頭を悩ませているのでしょう。

「普通は察するものだわ。子供だから分からない、では済まないと思うのだけれど」

むしろ、子供だからこそ周囲の空気を敏感に感じ取ってしまうものでしょう。私のように……

「致し方ございません、お嬢様」

「フィデ……」

「エンビー嬢が屋敷に來られたのは五歳の時でした。奥様の心の慰めになるのならばと、旦那様もお二人の言動を黙認されてきました。私共も奥様がユースティティアお嬢様を、エンビー嬢が母親を求めていたことを知っていましたから」

「そうね。二人にも同情の余地はあるわ。でも、今はもう違うでしょう？ 状況は変わっていると
いうのに、二人共それを理解せずに以前のままだわ」

お母様にとって、エンビー嬢は“娘の代わり”。

エンビー嬢にとっても、お母様は“実母の代わり”。

同病相憐れむ、とても言いましようか。

「お互いがお互いが必要としていること自体は何も悪くはありません。ただし、それがまかり通っていたのは、『本物が不在』だったからに他なりません」

「娘の代わり」として、愛されてきたエンビー嬢。

その娘が戻ってきた以上、代わりはもう必要ありません。

「ああ、だからかもしれませんわね」

「と、仰いますと?」

「エンビー嬢は、本能的に理解しているのではないかしら。自分が『代用品』にすぎないことを」
「なるほど……」

フィデはそこで一度、口を閉ざしました。

そして、しばしの沈黙の後、再び口を開きます。

「エンビー嬢がお嬢様を敵視する理由はそれですか」

「恐らくね。きつと無意識にそれを感じ取って、自分の存在意義を示そうとしているのだと思うわ」

「行動そのものがアレですが……。確かに、言われてみれば、そのような感じはしますね」

フィデもエンビー嬢の行動に思うところがあるのでしよう。

「幼子の癪癪かしゃくのようにも映りますし、お嬢様に奥様を取られたくないという感情だけで動いているようにも見えます」

「そうね。でも、まったく的的外れとも言いきれないわ」

エンビー嬢の行動は私が原因というよりも、純粹に母親を求めているものでしょう。

「実の母親のもとに戻るのが一番なのだけ……」

「ラーズ副団長の奥方は大層優秀な方の方です。それも、乳母だけでなく王子殿下の教育係も兼任しております。王宮を辞するのは難しいかと」

「そうよね……。確か王立学園に特待生として入学した方だったわね。王子殿下の教育係になるのも納得できるわ」

「はい。首席で卒業なさっております。在学期間中も常に首席をキープしていたそうです」

「それはすごいわね。王家がスカウトするはずだわ」

「はい。王立学園卒業後、女性で初めて王立大学に入学した才媛でもあります。男性だったら、文官として大いに活躍なされたことでしょう。ですが、女性にはそういった道はございません」

「……そうね」

女性だからと選択肢を奪われてしまう。

国が定めた法律とはいえ、頭脳明晰な女性にとって理不尽この上ないことでしょう。プライドの高い女性ならなおさらです。

「同情はするけれど、さすがにこのままではね」

「職を辞されるでしょうか?」

「無理でしょうね」

王家がどうのというわけではなく、恐らく本人が嫌がっているのでしょうね。話を聞く限り、ラース副団長夫人は今の仕事に誇りとやりがいを感じているようですから。娘のために仕事を辞めるという選択肢など、彼女の頭には存在しないでしょう。

「そういえば、お母様達は今どうしているのかしら？ 観劇から戻ってきているはずよね？」

「はい。奥様達は、一時間ほど前に帰宅なさっております。今は、サロンでお茶を楽しんでいる頃かと」

「エンビー嬢と一緒にしら」

「はい。いつものようにエンビー嬢も一緒にです」

「……そう」

頭の痛い問題が山積みだわ。

「一年経っても何も変わらないのは、お母様の行動のせいでもあるのよね」

「はい。エンビー嬢の言動も問題ですが、奥様がエンビー嬢を甘やかし、増長させているのも原因かと」

「そうでしょうね。はあ……アレはもうどうしようもないわね」

「はい」

フィデは私の発言を否定も肯定もせず、ただ静かに頷きました。『アレ』がどちらを指すのか分かっているのでしよう。

私はお母様は馬鹿ではないと思っています。本当に馬鹿なら社交界の荒波を泳ぐことなど、到底

不可能ですから。お父様がお母様のフォローをしているのでしようが、それだけで泳ぎ切れるような甘い場所ではありません。

ただ、お母様は根本的なところが抜けているというか、ズレているというか……残念な人なのです。世間知らずというか、なんというか……。その上、思い込みが激しいのです。特に、自分に都合の悪い現実は見ない傾向が顕著にあるのです。

「エンビー嬢はお母様の影響を確実に受けているわね」

「それは間違いありません。最近、会話そのものが噛み合わなくなってきたようです。奥様付きのメイドなどは、エンビー嬢を相手にするのを極力避けるようになっていきます。どうやらかなり疲れるらしく」

「それはまた……」

使用人達には同情を禁じえません。

貴族は必ず護衛とメイドを傍に控えさせるものです。そうしなければ何かあった時に使用人達のせいになってしまいますから。二人の近くで会話を聞かされている使用人達は、さぞ精神をやられていることでしょう、申し訳ないわ。フィデ曰く、「会話を聞くだけで疲れてしまっ」とか。

お母様付きの使用人が言うには、エンビー嬢は母よりも酷^{ひど}いらしく、話がまったく通じないそうです。

「これは子供がいる使用人達の意見ですが、エンビー嬢の場合は『話が通じない』というよりも、『幼児と話している感覚に陥る』そうです」

「要するに、エンビー嬢の精神年齢が幼い、ということね」
「恐らくは」

精神面での成長が追いついていないからこそ、言動も幼いままなのかもしれませんわね。勉強嫌
いもそこからきているのかしら？

何はともあれ、お母様のお花畑思考がエンビー嬢に悪影響を及ぼしているのは間違いないで
しょう。

「お母様を説得するのは骨が折れそうね」

「心中お察します」

説得するのは本来私でなくお父様の役目なのだけど。まあ、無理でしょうね。それよりも、お祖
父様達の雷が落ちるほうが早いでしょう。

「いずれにしても、今ここで私が悩んでも仕方がないわね」

「はい」

私はハーブティーを飲み干すと席を立ちました。

「エンビー嬢の処遇についてはお父様が決めるでしょうし、お母様に関してはお祖父様がお決めに
なるわ。私達は、それを見てから行動しましょう」

「かしこまりました」

フィデも席を立ち、私に向かって一礼します。

私はそれを見届けてから自室へと戻りました。

次の日、思った通り、手紙を読んだ祖父母が訪ねてきました。

「実の娘より他人の子供を可愛がるとはどういうことだ？」

お祖父様は大変ご立腹のご様子。無理ありません。

仕事中は梃子でも動かず、アトリエから出てこないお父様の代わりに対応するのは、当然お母様
です。祖父母が来ると知って、お母様は逃げ出そうとしたらしいのですが、そんなことは許されま
せん。使用人達に阻まれて、渋々対応する羽目になったとか。まったく、女主人が接待せずに誰が
するのでしょうか。

そうして嫌々ながら応対した結果、お祖父様に叱責されているというわけです。

「お義父様、エンビーちゃんは良い子で……」

「誰もそんなことは聞いとらん」

ギロリとお母様を睨むお祖父様。

ただでさえ眼光が鋭い上に、当主を退いた現在も威厳のあるお祖父様に睨まれては、お母様も黙
るしかありません。

「あれはなんじゃ？ 十一歳だと聞いたが、カーテシーのひとつも満足にできないとは。躰がなっ
ておらん！」

お祖父様の隣でお祖母様も顔をしかめています。

礼儀作法に人一倍厳しい祖父母の怒りはもったもなことですし、エンビー嬢にそんな態度を許し
ているお母様が非常識なのです。

私もその件に関しては祖父母と同じ意見なので、何も言うことはありません。

「ロディーテ・プライド」

「は……はい……」

「そなたはプライド伯爵に嫁いだ自覚が足りないようじゃな」

「そ、そのようなことはありません」

恐る恐る答えるお母様に、お祖父様は更に言葉を重ねます。

「ないと言えるか？ あの年頃なら既にメイド見習いとしての教育がなされていてもおかしくない。身に付けているものが上等品でなければ、下働きの者だと勘違いされるところじゃぞ」

そうなのです。エンビー嬢は最低限の教養すら身につけていません。野放し状態です。その状況で、お母様は彼女を愛でて、高価な衣装や靴などを与えているのです。それは、まるで立場と責任を与えずに、飾り立てているだけ。お祖父様が苦言を呈されるのも、無理からぬことですね。

「……エンビーちゃんはまだ幼いのです。どうかお許しください」

お母様はなんとか擁護しようとしますが、はつきり言つてそれは悪手です。

「八歳のユースティアを前にしてよく言えるな。それとも、他人の子供だから甘やかしているのか？ 他人の子供は責任を取る必要がないから、いくらでも甘やかせる。こんな母親を持ちながら、ユースティアはよくまあ賢い子に育っているものだ。ああ、そなたは子育てなどしてないかったな」

「そんな……」

お母様は言い返すことができず、お祖父様を前に何やら口ごもっています。事実ですしね。

そもそも、今更母親としてかわまれてもこちらが困ります。だって、お母様の愛し方は異常です。小動物を愛でると同じように、エンビー嬢を愛でているのですから。

「このままでは、エンビーとやらはろくな人間にならぬぞ。儂は孫にそんな人間を近付けたくない。そなたと違って、儂は自分の孫娘が可愛いのでな」

「……申し訳ございません」

「謝罪するなら初めからせぬことじゃ」

「……」

「ユースティアをしばらく、グリード公爵邸に通わせる」

「え……？」

「あの小娘から悪影響を受けては困るのでな」

「そんな」

お祖父様はお母様のご様子に疑念を抱いておられるのでしょうか。

口では謝罪の言葉を仰っていますが、エンビー嬢に対して嫉を施しているとは思えません。そのような教育がなされるかどうかについても、懸念されているのではないかと思います。

彼女が自身の立場を理解し相応しい振る舞いを身につけられるようになるとは、到底思えませんもの。私もお祖父様のお言葉に深く頷くばかりですわ。

お母様はエンビー嬢を使用人居屋や客間で生活させるのではなく、私と同様の扱いをしています

した。

それに、周囲にエンビー嬢を「娘」と紹介することもあるのです。他人の娘を使用人ではなく「娘」として扱うお母様の行動は、伯爵家にとって悪影響があると、お祖父様は考えているのでしょう。

「これはもう決まったことなの。お分かりよね？」

今まで黙って話を聞いていたお祖母様が、静かに仰いました。

お祖父様の隣でにこやかに笑うお祖母様は、目には見えない圧力をお母様にかけています。社交界は女の領域。お母様の所業を、お祖母様が知らないはずがありません。それでもなおお止めなかったのだから、きつとお祖母様には何かしらの考えがおりなのでしょう。

でも、公爵家も不利益を被るとなると、お二人がお母様に容赦がないのは仕方のないことなのでしょう。

「お祖父様、お祖母様。お世話になります」

力なく項垂れるお母様とは対照的に、祖父母は満足そうに頷きました。

そうして私は祖父母の采配のもと、グリード公爵邸とプライド伯爵邸での二拠点生活が始まったのです。

私の母、ロディーテ・プライド伯爵夫人は公爵家の次男に嫁ぐには身分が低すぎました。

ラース男爵家の一人娘として生まれたお母様は、幼い頃から大変な美貌の持ち主でいらしたとか。

そのため、両親だけでなく親族一同から溺愛され、蝶よ花よと育てられたらしいのです。

私は母方の親族とはまったく交流がありません。

彼らが男爵家としての立場を弁えて私との接触を避けているのか、それとも、一時期生死の境をさまよった私に利用価値はないと思ったのか。詳しい理由は分かりません。

何はともあれ、お母様が溺愛されて育てられたことは確かです。

ここまではお父様と一緒でした。

ただ、お父様と違ってお母様は厳しい教育を受けていないのです。女の子ということもあるでしょう。スパエラ王国では女子の爵位継承は認められていませんので。

子供が女子だけの場合、通常は婿を取るのですが、だからといって何もしなくていいというわけではありません。

むしろ、婿を取る令嬢には様々な役割があるとされています。

政治に関することから領地経営、経済状況、収支報告、帳簿の管理まで多岐にわたる役割を担うのです。もちろん、家や爵位によって異なりますが、基本的には、当主が把握している情報を共有しなければならぬ立場です。

ある意味では、他家に嫁ぐ令嬢よりも実務能力を求められるのですが、お母様はそういった教育は一切受けていません。

『お母様は可愛いから、いいの。皆がやってくれたのよ』

そう仰っていました。

それを聞いて、「そんなわけありませんでしょう」と、叫ばなかった私を褒めてほしくらしいです。

ラーズ男爵家にとつて、お母様という稀^{まれ}に見る美貌の娘が生まれたことは幸運であり、ある意味では不幸だったのかもしれませんが。

特別裕福でもない下位貴族に生まれたお母様が婿を取る場合、本来であれば同じ男爵家か、ひとつ上の子爵家との縁組が妥当だったでしょう。

伯爵家以上の男性が男爵家に婿入りするなどありえないことです。もちろんゼロではありません、あぶれた三男や四男が下位貴族に婿入りするケースは存在します。

でも、それは互いの家に「利益あり」と判断された場合に限られます。

地方の男爵家で、目ぼしい特産物があるわけでもないラーズ男爵家には、残念ながら高位貴族が婿に入ろうと思うほどの魅力は存在しませんでした。

『お母様の可愛さは王都でも評判だったのよ』

そう豪語するだけあり、当時のお母様の美しさは王都にも鳴り響いていたようです。

「鄙^{ひな}には稀^{まれ}な美貌」だと。

ラーズ男爵夫妻が早い段階で娘を嫁入りさせる方向に舵を切ったのも、そのためでしょう。

男爵家の後継者は甥の誰かを養子に迎えれば済む話ですものね。

『娘ほどの美貌ならば高位貴族に嫁入りできるかもしれない』

『社交界デビューすれば注目されることは間違いない』

『運良く王族に見初められるかもしれない』

最後はさすがに言いすぎでしょうが、男爵夫妻が玉の輿に乗る娘の姿を夢見たとしても不思議ではありません。

王族の妃は無理でも愛妾ならば、という淡い期待を抱いたとしても罪はないでしょう。

お母様はその期待に応えるだけの美貌を有していましたから。

国王の愛妾ともなれば、男爵家にも恩恵があつたはず……

「そちらのほうが良かったのかも……」

「ん？ 何か言ったか？ ユースティティア」

「いいえ。なんでもありませんわ」

あら、いけない。つい、心の声が漏れてしまったようすわね。

私は今、グリード公爵家の馬車に乗っているとところです。それも祖父母と一緒に。

「考えごとか？」

「大したことではありません」

「そうは見えんがな」

さすがは、海千山千の先代公爵。貴族社会の荒波を乗り切ってきただけあって、その眼光は鋭く、人によつては畏縮^{いしゆく}するかもしれません。

私はそんなお祖父様に向かって、にっこりと微笑み返しました。

「心配なさらずとも大丈夫ですわ、お祖父様」

「そうか？ 何かあれば遠慮せずに言うのだぞ」
「はい」

お祖父様はそれ以上追及してきませんでした。私が両親のことを考えていると分かっているのか、深読みするのがお好きなお祖父様のことです。私がお祖母様のことです。私が両親のことを考えていると分かっているのか、もしません。

話を戻しましょう。ラース男爵夫妻が考えたことは、実際、間違つてはいませんでした。お母様は十五歳の時に社交界デビューを果たし、そこでお父様に見初められました。ラース男爵家の目論見は見事に的中したわけです。

お父様が一目惚れをして、あれよあれよという間にお母様を口説き落としたのは、社交界では有名な話。

とんぱ子に結婚まで進んだのは、ひとえにお母様の美貌がものを言ったのでしょうか、それだけではありませんでした。

『お母様はね、私にこれ以上ない刺激を与えてくれる存在なんだよ』

芸術家らしいお父様の言葉です。

意識してなのか、無意識なのかは分かりませんが、男性を夢中にさせる魅力がお母様には備わっていました。それこそ、王族の愛妾になっていたとしても不思議ではないほどに。

早くから美貌にものを言わせていたお母様に対し、お父様は「絵を描いて生きていく」と宣言し、その夢を叶えた人物です。

二十歳という若さで既に名を馳せていたから、芸術家として生きることが許されたとも言えます。また、男爵令嬢との結婚が許されたのもお父様が末っ子で、更に政治や経済に興味を持たない、芸術家肌だったことも影響していたのでしょう。

グリッド公爵家としても敵対派閥でもない、力のない男爵家の娘なら娶つても良いと判断したに違いありません。男爵家に借金があるわけでも、領地経営が破綻しているわけでもありませんでしたから。

様々なことを考慮した結果、母のようなタイプが一番良いと当時は判断されたのかもしれないね。

芸術家のお父様と社交的なお母様の組み合わせは、まさに理想的な夫婦だと言えます。美しいものを愛するお父様はお母様の美しさをこよなく愛し、その美しさと魅力を更に引き立てるために、礼儀作法や社交界に必要な教養を身につけさせました。

自分の美しさをよく理解していたお母様は、「彼の提案が自分をより輝かせる」とすぐに受け入れ、お父様に言われるがままに教養や礼儀作法を学びました。

その甲斐もあってか、お母様は社交界の華として君臨したのです。

元々、着飾ることや目立つことが大好きなお母様は積極的に社交の場に顔を出し、自分を売り込んでいきました。

社交の場は女性が主役。そこで上手く立ち回れるかどうかで、夫のサポートができるかが決まるのです。

お母様はお父様を上手く支え、社交界での地位を盤石ばんじつなものとなりました。

そして、お母様の営業努力のおかげで、社交界でお父様の絵は売れに売れたのです。

お母様はお父様の絵を引き立たせるために、額縁などの装飾品にもこだわり、素晴らしい絵を更に引き立てて価値を上げました。

そして、欲しがる人には決して安売りはせず、高値で交渉したのです。

美術品に対する審美眼も優れていて、流行を的確に捉えてはそれに乗じて絵を高く売れることも忘れませんでした。

誰もが欲しがるものの価値を冷静に見極めて、適切な値段で売買する能力。お母様はそうした商売の才能を持ち合わせていたのです。

センスも良かったので、お母様自身でも流行を生み出しました。

二人は夫婦揃っていい具合に互いの才能を開花させ、補い合っていたのです。

これに関しては祖父母も感心していたようです。

ここまでなら良かったのに。彼らは、やりすぎてしまったのです。

両親は、私の病に関しても同じように利用しました。

つまり、“悲劇の夫婦”として見事に同情を集め、社交界での評価を高めていったのです。

特にお母様は、“悲劇の妻”や“悲劇の母親”といった役割を完璧にこなしてしまわれました。

もし意図して演じていたのであれば、それは見事な手腕と呼べたでしょう。

けれど、お母様には演じている意識などもなく、天然のままにその役を果たしてしまわれたの

です。

打算や画策など考えつかないお母様だからこそ、とも言えます。奇跡のような人です、素で社交界を泳いでいるのですから。

悪意がないから、余計にタチが悪い。本当に、困った人……

両親は結婚祝いとして、先代グリード公爵夫妻からプライド伯爵位と王都の屋敷を贈られていました。

祖父母はお父様の性格をよく把握していたのでしょう。領地を割譲しなかったのですから。お父様は領地を治めさせるより、芸術家として活動させたほうが上手くいくと考えたのでしょう。

お父様もその意図を正しく理解し、芸術活動を許可されたことに感謝していました。

ですが、若くして大成した両親は、ここにきてよろしくない状況に陥りつつありました。祖父母が見逃せないほどの……



王都にあるグリード公爵邸は、広大な面積を持つお屋敷です。

王都でこれだけ広いなら、本拠地である領地はもっと広いと容易に想像が付きま

す。領地のお屋敷は王都にあるお屋敷の五倍の広さだと、以前お父様が言っていました。

グリード公爵家は広大な領地を治め、多くの領民の生活を支えています。

富と権力を有した、王国でも一、二を争う名門。歴代当主は皆聡明で政治手腕に長け、時には王家を凌ぐほどの勢いを持ったと噂される一族なのです。

そうした一族なので、教育も他家とは比較にならないほど厳しく、ここに通うようになってから、私が受ける教育は伯爵家で受けたものより一層厳しくなっていました。

これはもう伯爵令嬢の域を超えているのでは？　と思うくらいのスパルタ教育です。

今まで以上にマナーについて厳しく叩き込まれたのはもちろんのこと、言葉遣いから挨拶の仕方、手紙の書き方に至るまで徹底的に教え込まれました。

「公爵令嬢として相応しい立ち居振る舞いを求められるのは当然でございます」

「先生……。申し訳ありませんが、私は『伯爵令嬢』です」

「もちろん、心得ております。ユースティティア嬢がまだ伯爵令嬢でいらっしゃることは」
含みのある言葉に、思わず閉口してしまいました。

つまり、いずれは「公爵令嬢」になるのだと言いたいのでしょうか？

……今のところ、そういった話は出ていません。ただ、公爵邸に私の部屋が用意されたり、家庭教師の人数が増やされて「いつ公爵令嬢になっても問題ない教育」を受けさせられていることは確かです。あくまで可能性の話ですが。

それでも、家庭教師の先生方は皆本気のようなのです。

祖父母が絵画や音楽の教育にまで力を入れ始めた時は、本当に頭を抱えました。

「ユースティティア様なら、きっと才能が開花なさるに違いありません」と、先生方は言うのです。

芸術方面の才能を期待されているようですが、正直、父親がそうだからといって娘も同じだとは限りません。

芸術にまったく興味が無いわけではないのですが、私にはどうも向いていないようです。

「十分、才能はあります」と力説してくださるのは嬉しいのですが、それは人より少し上手だというだけ。

頑張ればプロになれるでしょうが、お父様のように頂点を取れるほどの才能は私にはありません。趣味として楽しむのが一番でしょう。

「ユースティティアは知的好奇心が強いわね」

ある日、公爵邸で勉強をしていると、お祖母様が私のノートを覗き込んでそう言いました。

「お祖母様」

「あら、ごめんなさい。勉強の邪魔をしてしまったわね」

「そのようなことはありません」

「そう？　その課題は、お祖父様から出されたものでしょう？」

「……よくご存じで」

「ふふ、子供達も同じような課題を出されていたもの。よく覚えているわ。今のユースティティアとまったく同じで、楽しそうに課題を解いていたわ。さすが、グリード公爵家特有の傾向ね」

「そうなのですか？」

「ええ。グリード公爵家は皆、知的好奇心が旺盛なのよ。だからこそ、ここまで権力を有し、領地を豊かにできたの」

「そうなんですわ」

「ええ。だから、貴女もきつとそうなるわ」

お祖母様は優しく微笑み、私の頭をそっと撫なでました。

お祖母様が私に与えた課題は、王国史と貴族年鑑を覚えることです。王国の成り立ちから歴代国王の偉業、宰相や将軍の名前、過去の戦歴まで、王国に関する様々な知識が求められました。

貴族年鑑には伯爵家以上の家系図が載っています。その家系図を読み、公爵家の血筋について学ぶようにとのお達しだったのです。

こういった課題は嫌いではありません。どちらかというと好きなほうです。

「貴女を見ていると、ユーノスの小さい頃を思い出すわ」

「お父様の？」

「ええ。ユーノスも最初は勉強ばかりしていたのよ。いずれは文官になるのではないかと思っていますわ」

「お父様が文官に？」

意外な言葉に驚く私を見て、お祖母様はクスクスと楽しそうに笑います。

「あの子は器用だから何でもこなせたのよ。いずれは宰相か、大臣か。きつと優秀な文官になるだろう、とね。絵の才能があるのは知っていたけれど、プロになるなんて当時は考えもしなかつ

たわ」

「そうなのですか？ コンクールで何度も賞を取っていたと聞いていますが……」

「ええ。けれど、まさか本当に画家になるなんて思いもしなかつたわ。てつきり趣味で絵えを嗜たしなむ程度だと思っていたものだから」

お祖母様は苦笑し、「本当にあの子は予想外だったわ」とこぼしました。

政治家として活躍するかたわらで趣味の絵画を楽しむと考えていた者が公爵家では多かつたそうです。

お祖母様を始めとするグリード公爵家の人々にとって、芸術は自分達の価値を高めるためのひとつの手段でしかありませんでした。

でも、お父様だけはその枠からはみ出した存在だったのです。

お祖母様が言ったように、伯父や伯母達は皆非常に頭の回転が速く、記憶力が良く、洞察力も高い人達です。もちろん、それだけでなく人脈を広げることに長けていました。

優れた彼らが政治や経済に興味を持つのは当然のことでしたし、見合うだけの教養を身に付ける必要もあつたのです。

公爵邸で過ごす時間が増えるにつれて、私は次第に理解していきました。

お父様は公爵家で異質だということを――

私が祖父母のもとに通うようになって、しばらく経つたある日。

グリード公爵邸に与えられた自室で、私はお祖母様と三時のティータイムを楽しんでいました。
「貴女がこの屋敷に来るようになって、もう一ヶ月近く経ったのね」

お祖母様は紅茶の香りに目を細めながらそう言いました。

「はい。おかげ様で毎日充実した日々を過ごしております」

「そう。それなら良かったわ。……ねえ、ユースティティア」

「何でしょう？」

「ロディーテさんは相変わらずなのかしら？」

「……はい」

「そう。ユーノスは彼女には甘いのだから。あの少女を以前と同様に扱っていても注意しないなんて、仕方ない子」

祖父母が危惧していた通り、お母様はあれだけ叱責されながらいまだにエンビー嬢を“娘扱い”しているのです。

「私も注意してはいるのですが、改める様子はございません」

「まあ。困った人ね」

お祖母様は本当に困っているのか、疑わしくなるような笑顔を浮かべていらっしやいます。

お母様には何を言っても無駄だと、ある意味諦めているのかもしれない。そしてそれは当たっています。

どれだけ注意しても、「ユースティティアは意地悪だわ」「貴女まで公爵家の人達と同じことを言

うのね」と泣くだけで、私の言葉は届きません。

そんなお母様の姿を見て、エンビー嬢は「ロ・デ・イ・お・ね・え・ち・や・まを虐めないで！」と、私を批難してくるのですから。勘違いも甚だしい。

エンビー嬢に庇われ上機嫌なお母様にも呆れるしかありません。

彼女の我が儘を「子供のすることだから」「小さい子は元気が一番よ」と、わけの分からないことを言っては容認しているのですから。これはダメだと悟るしかありません。

お母様はエンビー嬢の“母親”ではありません。なのに、実の娘より他人の子供を可愛がる言動ばかり。

これを他者が見ればどう思つか、まったく理解していないお母様にお祖母様が匙を投げたくなるのも仕方ないことです。

「随分と注目されているわ」

「お母様がでしょうか？ それとも……」

「両方よ。メイド見習いを美しく着飾らせる遊びが流行っているのかと、他の夫人に聞かれてしまったわ」

それは、なんとも……

「嫌味ですね」

「そうなの」

「なんと答えたのですか？」

『芸術家のインスピレーションを邪魔したくなくて』と答えておいたわ」

「また……返答に困る嫌味返しですね」

「ええ。でも嘘は言っていないわ。ユーノスのインスピレーションを刺激するのは今も昔もロディーテさんだけ。そのことは周知の事実ですもの」

「そうですね」

お父様は基本的に、人物画を描くことはありません。唯一の例外が、お母様なのです。

お母様をモデルとして描いた人物画は数多くありますが、他は一枚も見ることがありません。他者を描く気がまったくないのでしょう。

「だから、私の答えは間違っていないわ。そうですね？」

「はい」

ニッコリと笑うお祖母様に、私は苦笑を返すしかありませんでした。

最近はお母様はお茶会にエンビー嬢を連れ歩いているようで、ご夫人方の間でちょっとした話題になっているそうです。

「本来の立場に見合わない贅沢な暮らしをさせるのは、あまり良いことではないわ」

「はい」

「後々、苦勞するのはあの少女です。彼女の一生に責任を持つつもりならともかく、ロディーテさんはそんなこと一切考えていないでしょう」

「そうですね」

「今ならまだ引き返せる年齢だわ。手遅れになる前に矯正するべきよ」

お祖母様の仰りたいことはよく分かります。

そして、エンビー嬢のことを思えばそれが正しいということも……

「お母様は彼女をどうしたいのでしょうか？」

ポツリと漏らした私の言葉にお祖母様は少し目を見開き、それからゆっくりと微笑むと、諭すような口調で話し始めました。

「ロディーテさんの気持ち次第、と言いたいくところだけれど。何か切っ掛けさえあれば、彼女はお気に入りの少女を簡単に手放すでしょうね」

「あれほど執着しているのにですか？」

「ええ。ロディーテさんにとって、あの少女はしよせんは代えのきく存在にすぎません。最初はお気に入りの玩具を手放すのを惜しむでしょうが、実際のところはそんなに執着心はないのよ。ロディーテさんは気まぐれだから」

私がお母様をかなり面倒な人だと再確認した瞬間でした。

「最終的にはユーノスがなんとかするでしょう。ロディーテさんに甘い子だけれど、いつまでもよその子供に愛情を注いでいる妻の姿を見るのは、良い気分ではないでしょうから」

「そうですね。お父様がお母様に厳しく対応すれば、事態はこうも拗れなかったでしょうに」

「あの子はロディーテさんを愛しているから。彼女に嫌われるようなことはしたくないのよ。……本当に、仕方のない子だわ」